

令和7年度 校内研究概要

1 研究主題

「主体的・対話的で深い学び」を追究する児童の育成
～児童が自分たちの力で学びをつくり上げていく授業をめざして～

2 主題設定の理由

(1) 国府津小学校グランドデザインから

本校では、「向上心をもち、美しい心で、強い心と体の育成」を目標として掲げている。本年度はその中でも、学ぶ力として「『聞いて考えてつなげる』対話を通して考えを深める」「課題を見だし、他者（友達・地域の方々）と連携・協働して主体的に課題解決に取り組もうとする態度」の2点の向上を目指している。

(2) 児童の実態から

本校の児童は、エネルギーに溢れ、自分たちで学校のことを考えていきたい、自分たちで様々なことを成し遂げたいという気持ちを潜在的にもっている。昨年度の研究を通して、児童が主体的に学んだり行事等に取り組んだりする地盤が形成されつつある。

しかし、教師が児童を主導するような形も見られた。児童の思いよりも教師の思いや学習内容を優先し、授業を進めてしまうということも少なくなかった。そのような指導が続く場合、児童は授業だけでなく、生活の場でも受け身になってしまう。児童の可能性を信じ、児童自身の内面から出てきた「学びたい」「やってみたい」といった気持ちを活動に生かすことで、より主体的になっていくと考えられる。

児童は、自分の「気持ちをわかってもらえる」他者を求めている。そのためには、お互いの考えを受け止め合える関係を作っていくことが何より大切である。自分の思いを語ったり、その友達の思いを受け止め一緒に考えたりすることが、温かい学習集団を作っていくことにつながっていく。また、児童は楽しく一生懸命になれる活動に取り組んでいるとき、自分にも友達にも温かく接することができる。そういった仲間関係の中で子どもは健やかに成長していくだろう。

「主体的・対話的で深い学び」を追究することによって、温かく意欲的な仲間関係の構築を目指し、友達と共に成長していることを実感できる児童を育てていきたい。

新学習指導要領では、これからの予測が困難な時代に対応するために、教育課程を通して育成を目指す資質・能力を「生きて働く『知識・技能』の習得」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」の3つの柱に整理されている。

以上の2点より、教師主導型の授業から児童が自ら課題解決を行っていく児童主体の授業へ転換をすることが、これらの資質・能力の育成につながると考え、本主題・副題を設定した。

3 「主体的・対話的で深い学び」について

○「主体的」とは

主体的な学び＝児童が主語の学び

児童が自ら問い、調べ、考え、判断し、表現する、または学習を自ら振り返る学習活動。

児童の「やってみたい」「学びたい」からスタートさせたい。そのため、授業者は子どもの内発的動機づけができるように働きかける。

○「対話的」とは

児童がコミュニケーションを通じて考え合い、その過程で相互の知識・技能を交換し合って協働的に学ぶ学習活動。児童自身が体験したことを「自分の言葉」で語る。「わかってもらいたい」「わかっただけでいい」という関係の中で、発言者と聞き手が一体になって考えを協働的に作っていく活動。そのため、授業者は主体的な聞き手を育て、児童の「つぶやき」を大切にする。また、児童の発言の中から対立や問いを見つけ出すなどの支援やフォローをする。

○「深い学び」とは

学習活動で得た知識・技能が、その後の児童の生活・暮らしへとつながり、自分自身が変わったり新しい見方や考え方が形成されたりすること。授業者は、児童の自己評価や児童の姿を見取る。

4 主題に迫る手立て

(1) 児童の「やってみたい」を生かした授業づくり

児童の「やってみたい」という主体的な学習活動は、児童の「心が動く」ことから始まる。児童の心を動かすためには、児童の先行体験が不可欠である。先行体験と事象や情報の双方を対比させることで、「面白い」「どうして?」「同じだ」「ちがう」などの感情的な反応が生じる。

児童が主体的に学ぶためには、この「心が動く」ことから問いを成立させ、学習内容を自分事として捉えさせる必要がある。そのために児童の生活経験や既有知識について授業者が見取り、児童が自ら学びを探究していけるように示唆したり焦点化したりしていく。

また、本研究では抽出児を設定して単元学習活動を構想する。抽出児がどのような追究を行うか予想し、その児童にそれぞれどのような追究をさせたいか構想して、単元の学習活動を計画する。また、授業実践後の分析・検討の際にも抽出児がどのような追究をし、本時や単元の学習活動がその児童にとってどのような意味を持ち得たのか、どのように育ったのかについて考え合う。

一人の児童に着目することは、児童相互のつながりを詳細に見ることにつながる。ひいては、児童全体を詳細に見ることにつながっていく。児童を見取することは、児童の「心が動く」ことを見取ることにもなる。これによって、児童の「心の動き」「やってみたい」を生かしながら、児童が自ら学びをつくり上げていくことを支援していくことにつなげていきたい。

(2) 児童の「やってみたい」を認め合える環境づくり 「聞き合いタイム」★本年度の重点事項

児童が「主体的・対話的で深い学び」を追究するためには、児童同士で対話を行うことが必要不可欠である。本年度は、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、「主体的なきき手」の育成に重点を置いていきたい。

「主体的にきく」とは、発言者と共に考え、その考えの深まりや広がりを助けることである。例えば、黙って聞いているのではなく、発言者に対して「言いたいのは、こういうことじゃない?」と助け船を出したり、「それってどういうこと?」と訊ねたりすることである。そういったきき方ができるようにするために、まずは児童の「つぶやき」を大切にしていきたい。

児童の「つぶやき」は、「心が動く」ことで発せられる。つまり、発言者の言葉に主体的に関わっているということになる。授業者は、児童のこういった「つぶやき」を拾いながら、児童に投げかけたりつないだりしていく。これによって、主体的にきく姿勢が育つであろうと考える。

また、「主体的なきき手の育成」に向け、「きき合いタイム」を朝の時間に実施する。また、その際に「話す・きくステップ表」を活用し、どのようなきき合い活動が良いのかの基準とする。「きき合いタイム」では、発言者が日常の気づきや興味関心事を話し、きき手はその語りを主体的にきく。発言者は聞き手の「つぶやき」を受けて、聞き手と一体になって、語りを一緒に作り、展開していく。この際に、発言者のスピーチにならないように教師は留意し、きき手が関わり合えるように示唆していく。これが「相手にきいて(わかって)もらいたい」という発言者と、「相手の言っていることをきき(わかり)たい」というきき手が一緒に考えていくことへつながっていくだろう。

○「つぶやき」について

質の高い「つぶやき」とは？

発言者を励ましたり、発言者が語ることを促したりする「つぶやき」のこと。

×発言泥棒、割り込み、話の腰を折る野次や冷やかし

【発達段階における目指す姿】

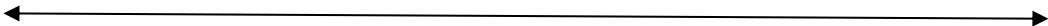
低学年...「つぶやき」を出すことの保障。どんな「つぶやき」が良いか考えられる。

中学年...自分はどのように聞いたのか、自分はどの部分がわからないのか、自由に出し合える環境づくり。相手の反応を受け取りつつ、「自分の言葉」で柔軟に説明できる。

高学年...「自分の言葉」で語ることに友達が「つぶやき」で温かく関わり、共に成長していることが実感できる。「心の動き」に正直に「自分の気持ちを自分の言葉で語れる」

(3) 児童の「やってみたい」の実現に向けて 「主体的な学びのものさし」

児童が自分たちの力で学びを作り上げていくために、授業者が意識すべき指標を以下の「主体的な学びのものさし」にまとめた。授業をするにあたり、授業者及び児童は現在どの辺りにいるのか、単元を通してそれぞれどこを目指していきたいのかを明確にし、学習の中で意識していきたい。

「主体的な学びのものさし」											
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
											
	0～2		3～5			6～8			9～10		
課題	ほぼ教師が決定している		選択肢から児童に選ばせる			児童が選択肢を作り、選ぶ			児童が自分で決定する		
学び方	教師が学び方を決定する		指示に対して児童が、何をしているのか意識している			単元の一部で児童が学び方を決定する			単元で児童がどのように学ぶか決定する		
学習形態	教師が誰と学ぶかを決める		教師が範囲を定めて、誰と学ぶかを決める			過程の一部で、誰と学ぶか児童が決める			児童がすべての過程で誰と学ぶか決める		

※【課題】 ・問いの作り方

【学び方】 ・比較（比べる）...共通点と相違点 ・五感を使って ・関連させる
・多面的・多角的な見方・考え方等...情報収集の仕方、整理・分析の仕方、まとめ・表現の仕方

【学習形態】 ・個の学び方、誰かと一緒に学ぶための学び方

5 研究の方法

(1) 授業提案について

①全員が、年間を通して研究授業を1回行う。

- ・全体会の提案は、低・中・高学年・LRブロックで各1名行う。（原則、年次研対象者は除く）
- ・各ブロック提案は、各ブロックで参観・協議を行う。（他ブロックからの参加も可）
- ・当日は、参観者用に抽出児（本単元の中で、これまでどのように学んできて、この時間に予想される学びの姿）を記入した「座席表」を用意し、協議後に回収する。

②参観のしかた

- ・運営担当のブロック内で、カメラ記録及び授業者や児童の発言の記録を行う。（推進委員以外）
- ・座席表に児童の様子を記入し、協議の場に持ち寄る。

(2) 抽出児について

授業者は、「この教材と出会い、Aさんはどんなことを言うか」「Bさんの考えを聞いて、どのような問いをもつだろうか」「Aさんの問いを深め、Aさんなりの追究を深めさせるためには、どのような事実に眼を向けるように、どのように示唆するとよいか」と想像した上で、単元や時間の学習活動の展開を計画する。

- ・授業者が**児童2～3名**を抽出する。また、抽出の基準は授業者が決定する。

i 気になっている子

抽出児の考え方や感じ方、根底にある感情や願い、成長を期待できる方向などについて教師が探りたい子ども

ii 育てたい子

その単元で、子供の考え方や感じ方を揺さぶり、切実な追究を成立させることが期待できるような子

- ・研究推進委員は、抽出児の記録をとる。記録のとり方については、記録用紙参照。
- ・参観者は、抽出児を中心に児童の学びを見取る。（その子の「よさ・成長・可能性」が示されているような言動の記録があるとよい）

(3) 研究協議の進め方

- ①研究協議はオクリンク+で行う。グループのメンバーは研究副主任が構成する。

オクリンク+の部屋は、提案するブロックが「協議日_1年生_校内研究用_その他」で作成する。

その際に、コピーして使えるように付箋のサイズ及び文字サイズを大きくしたものをそれぞれのグループのボードに1枚置いておく。

- ②研究協議の流れ

○グループ協議Ⅰ（司会は研究推進委員）

- ・オクリンク+内の黄色い付箋に発見した児童の学びについて書き、出し合う。
- ・その際に記録を参照しながら、どのような場面のどのような状況で出された表現かも確認
- ・児童にとってどのような表現、学びであったかの解釈をピンク色の付箋に書く。

○グループ協議Ⅱ

- ・A・B・C・Dに再度編成する。（推進委員はテーブルに残り、グループ協議Ⅱの記録を行う）
- ・各グループで話し合われたことを簡単に報告。その中で、話し合う論点を決め、意見交換を行う。
- ・観察対象とされた子どもについて、今後どのような成長の方向性が見えてきたか、その成長を実現していくために、どのような指導・支援が必要か考える。

○授業者

- ・授業者は研究授業と協議を通じて、今後どのように子どもたちの学習活動を構想し、実践していくかについての見通しを語る。

2025年度 国府津小学校「話す・きくステップ表」

